

「主体的な学び」の創造

変化の激しい今後の社会を担う児童生徒に必要な資質・能力を身に付けさせるためには、これまでの知識ベースの学びに加え、これからの社会を生き抜くために必要な資質・能力の育成を目指した「主体的な学び」の創造を目指す必要がある。「主体的な学び」を促す教育活動として、自ら課題を見付け、課題の解決に向けて探究的な活動をしていく「課題発見・解決学習」を推進していく。

1 「主体的な学び」とは

これまで、知識量の多寡によって人の能力を判断する捉え方があった。しかし、今後ますます情報化が進む社会においては、知識量の多寡よりも、学習者自身が学んだ知識を相互に関連付け、構造化して、より深く理解し、学習後の異なる場面で活用することができるよう、知識の質を高めることが求められる。知識の質を高めることは、「社会を生き抜くために必要な資質・能力」を育成することにつながる。その育成を目指すために、「主体的な学び」を児童生徒が展開していくことが重要となっている。

「主体的な学び」とは、学習者基点の能動的な深い学びである。

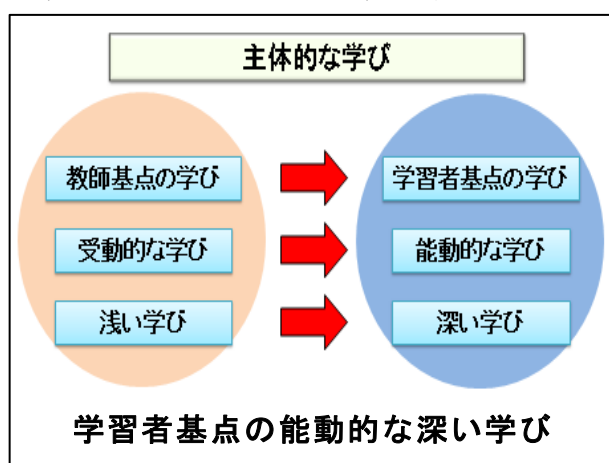
「学習者基点の学び」とは、学習の全てを児童生徒に委ねるということではない。教師は、児童生徒をよく観察して、児童生徒の興味・関心、既有知識、経験、生活等を把握しなければならない。把握した内容を踏まえ、児童生徒の思いや願い、考えなどを大切にしながら、教科等の目標を達成させるために必要な学習内容や効果的な指導方法を取り入れ、学習活動を組み立てていくということである。

「能動的な学び」とは、学習者が、単に活動していることをもって「能動的」とは言わない。学習形態を問わず、学習者が学習活動に自ら積極的に関与する学びでなければならない。

「深い学び」とは、単に知識の習得に留まらず、学んだ知識をつなげて新たな知識を生み出したり、新たな学びを展開したりするような学びである。これに対して、教師から学習者に向けて一方的に授けられただけの知識は長く脳裏に留まらない。このような知識を享受するだけの学びは「浅い学び」と言われる。

このような「主体的な学び」は、学習者自身が、学習活動を振り返り、自らの見方・考え方の高まりや学習の仕方を自覚的に捉え評価することによって、一層促されるものである。これにより、学習者は、更に学習意欲を高め、自らが授業での学びを予習や復習などにつなげていくというような自立的な学習を進めていくことになる。

この「主体的な学び」を促す教育活動の一つとして挙げられるのが、「課題発見・解決学習」である。



2 「課題発見・解決学習」の考え方

(1) 「課題発見・解決学習」とは

「課題発見・解決学習」とは、児童生徒が自ら課題を見付け、課題の解決に向けて探究的な活動をしていく学習である。

「課題発見・解決学習」には、次のような活動が考えられる。

〔課題の設定〕, 〔情報の収集〕, 〔整理・分析〕, 〔まとめ・創造・表現〕, 〔実行〕, 〔振り返り〕 など
--

これらは、いつも順序よく形式通りに繰り返されるわけではなく、順番が前後することもあるし、一つの活動の中に複数のプロセスが一体化して同時に行われる場合もある。また、この過程は、次のページの図に示すように何度も繰り返され、スパイラルに高まっていく。特に、充実を図ることが求められるのは、〔課題の設定〕, 〔整理・分析〕, 〔振り返り〕である。

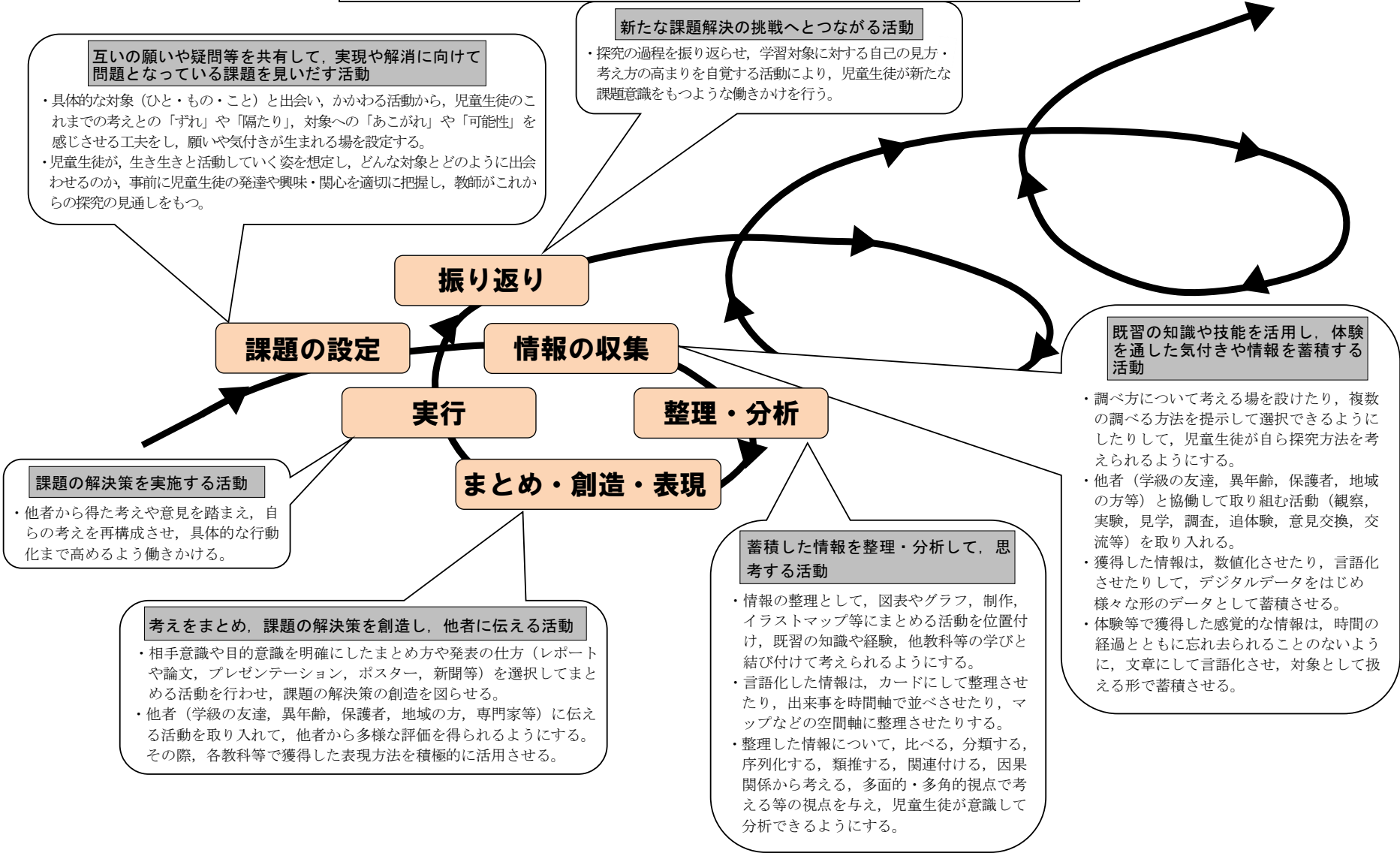
〔課題の設定〕は、児童生徒が自ら課題意識をもち、その意識が連続発展することが大切である。しかし、児童生徒が自ら課題をもつことが大切だからといって、教師が何もしないでじっと待つ、あるいは、教師が一方的に「今日は、〇〇について勉強します」と宣言するだけの課題の提示では、児童生徒の本時の学習に対する課題意識や学習への意欲は喚起されない。そこで意図的な働きかけをすることが大切である。事前に児童生徒の興味・関心等を適切に把握し、これまでの児童生徒の経験や既有的知識等との「ずれ」や「隔たり」を感じさせたり、対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせたりする工夫が必要である。児童生徒に「気になるな」という違和感や「何とかしたい」という必要感などをもたせることができれば、児童生徒自らの課題意識へとつなげ、「めあて」をもたせていくことができる。

〔整理・分析〕については、収集した情報をそのまま模造紙に書き写して発表するなど、児童生徒の思考、判断する場の不足が課題として指摘されてきた。こうした状況を改善するためには、収集した情報を比較したり、分類したり、因果関係を捉える等の視点を状況に応じて教師が児童生徒に示し、児童生徒の思考する活動を促すなどの取組が必要である。

〔振り返り〕については、「めあて」に対応した「まとめ」を行う際、できたか、できなかったかという結果だけでなく、「授業で習う内容は、こんな形で実社会とつながっている」、「自分たちで考えることは楽しい。もっと〇〇について調べてみたい」、「今回は〇〇が原因で失敗したので、次回は△△の視点からアプローチしてみよう」といった思いを児童生徒がもつことにより、新たな課題解決の挑戦へとつながり、主体的な学習を進められるようになる。

「課題発見・解決学習」を進めるに当たっては、活動自体が目的化したり、形式的に繰り返したりすることがないように、留意することが大切である。

「課題発見・解決学習」の過程（イメージ）



(2) 「課題発見・解決学習」の現状

「基礎・基本」定着状況調査の結果によると、「課題発見・解決学習」に関わる児童生徒の意識と、学校の指導に対する意識にずれがあることが明らかになった。

特に中学校において、生徒の意識と学校の指導に対する意識に20ポイント以上の差がある質問事項が多く見られた。

各学校においては、自校の児童生徒の意識をしっかりと把握し、特に学校の指導に対する意識とのずれが大きい項目については、要因を考察するとともに、一層指導改善を進めていく必要がある。

「課題発見・解決学習」に関する児童生徒質問紙調査の回答状況と学校質問紙調査の回答状況との関連

児童生徒の主体的な学びを促す教育活動の一つとして、「課題発見・解決学習」が挙げられる。ここでは、児童生徒質問紙調査の「課題発見・解決学習」に関する質問事項に「よく当てはまる」、「やや当てはまる」と肯定的に回答した児童生徒の割合と、それらの質問事項に対応した学校質問紙調査の質問事項に「よく当てはまる」、「やや当てはまる」と肯定的に回答した学校の割合を示す。

※ 「H30-H29」はH30とH29の差を示している。

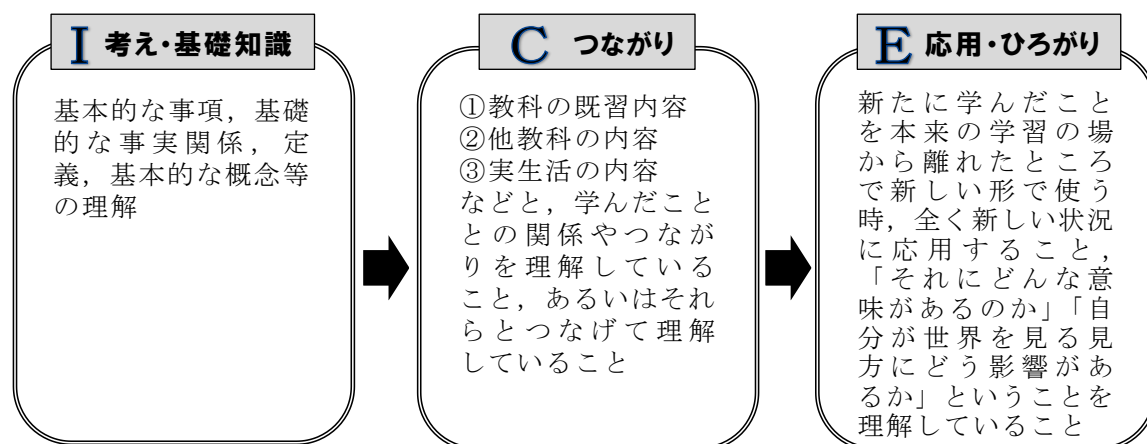
※ 児童生徒の肯定的な回答と学校の肯定的な回答の差が20ポイント以上あるものは網掛けで示している。

質問事項 (上：児童生徒 下：学校)	肯定的な回答の割合 (%)									
	H30				H29				H30-H29	
	小学校 (上：児童 下：学校)	差	中学校 (上：生徒 下：学校)	差	小学校 (上：児童 下：学校)	差	中学校 (上：生徒 下：学校)	差	小学校 差	中学校 差
課題の 設定	(13) 授業では、解決しようとする課題について、「なぜだろう」、「やってみよう」と思っています。	81.5		70.4		81.2		68.4		
	(14) 授業では、解決しようとする課題について、「たぶんこうではないか」、「こうすればできるのではないか」と予想しています。	96.6	-15.1	94.6	-24.2	95.8	-14.6	94.2	-25.8	-0.5
	(15) 授業では、課題を解決するために、進んで、資料を集めたり取材をしたりしています。	85.5		75.9		85.1		74.3		
情報の 収集	(16) 授業では、課題を解決するための情報を集める前に、どのような方法だと必要な情報を集めることができるのかを考えています。	98.7	-13.2	98.3	-22.4	99.2	-14.1	96.7	-22.4	0.9
	(17) 授業では、調べたことなどを、図、グラフ、表などにまとめています。	52.2		40.6		51.8		39.9		
	(18) 授業では、調べたことなどを、図、グラフ、表などにまとめて整理するような指導を工夫しました。	90.6	-38.4	81.5	-40.9	88.9	-37.1	85.9	-46.0	-1.3
整理・ 分析	(19) 授業では、調べたことなどを、図、グラフ、表などにまとめています。	60.2		48.4		59.9		48.0		
	(20) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	90.9	-30.7	78.7	-30.3	88.8	-28.9	83.8	-35.8	-1.8
	(21) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	71.6		52.4		73.7		53.1		
まとめ 創造・ 表現	(22) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	94.3	-22.7	87.0	-34.6	94.1	-20.4	89.6	-36.5	-2.3
	(23) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	74.1		65.5		75.5		66.0		
	(24) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	93.2	-19.1	92.9	-27.4	90.7	-15.2	93.8	-27.8	-3.9
実行	(25) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	65.5		59.4		65.8		58.2		
	(26) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	99.8	-34.3	99.2	-39.8	99.6	-33.8	98.4	-40.2	-0.5
	(27) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	68.4		60.7		67.9		59.4		
振り返り	(28) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	98.1	-29.7	97.5	-36.8	98.8	-30.9	97.5	-38.1	1.2
	(29) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	71.4		66.5		72.5		66.2		
	(30) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	92.0	-20.6	82.4	-15.9	88.2	-15.7	85.0	-18.8	-4.9
その他	(31) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	70.3		67.3		71.4		66.1		
	(32) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	86.7	-16.4	88.7	-21.4	86.7	-15.3	91.7	-25.6	-1.1
	(33) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	74.8		60.8		75.4		59.0		
総合	(34) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	92.2	-17.4	79.5	-18.7	89.5	-14.1	77.9	-18.9	-3.3
	(35) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	81.9		74.3		81.3		72.4		
	(36) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	95.7	-13.8	94.1	-19.8	93.9	-12.6	92.5	-20.1	-1.2
その他	(37) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	80.1		80.2		79.9		77.5		
	(38) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	99.1	-19.0	99.6	-19.4	97.9	-18.0	97.5	-20.0	-1.0
	(39) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	69.4		58.3		70.2		56.3		
総合	(40) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	93.6	-24.2	82.9	-24.6	95.7	-25.5	84.2	-27.9	1.3
	(41) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	69.3		67.7		69.6		67.5		
	(42) 授業では、自分の考えを積極的に伝えています。	94.1	-24.8	88.3	-20.6	90.9	-21.3	90.5	-23.0	-3.5

(3) 「課題発見・解決学習」の質的高まり

「課題発見・解決学習」の質をより高め、学びを「主体的な学び」にしていくためには、基礎的・基本的な知識・技能に留まるのではなく、それらをつなげ、いろいろな場面で活用できる知識・技能に高め、それらを統合して新たな価値を創造していく必要がある。

その過程を捉えるための一例として、Sue Fostaty Young・Robert J. Wilson (2013) のICEモデルがある。「考え・基礎知識 (Ideas)」、「つながり (Connections)」、「応用・ひろがり (Extensions)」といったように、学びの質の高まりを重視し、その変容を捉えることができるものである。



それぞれの段階の活動で使用される「動詞」の例を次に示す。

考え・基礎知識	定義する，記述する，説明する，暗記する，計算する，反復する 等
つながり	比較する，分類する，推論する，差別化する，統合する 等
応用・ひろがり	発明する，創造する，提案する 等

これらの動詞は，異なる認知プロセスを示すので，学びの深さもそれぞれの段階によって異なることが分かる。

例えば，中学校音楽科で，「大地讃頌」を教材として扱う題材では，次のように考えられる。（詳細は「平成29年度 広島県教育資料」P113～115 参照）

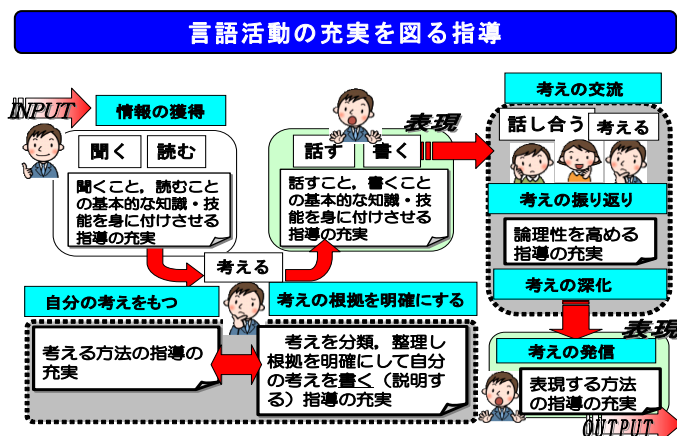
考え・基礎知識	合唱曲「大地讃頌」の音楽を形づくっている要素を知覚・感受し，国語科や社会科との関連を図って，歌詞の内容や楽曲の背景等を理解している。また，音楽表現を創意工夫するための技能を身に付けて歌っている。
つながり	「大地」や「平和」などをテーマにした楽曲を比較して聴き，曲想や歌詞に込められた思いなど音楽の特徴について，共通点や相違点を捉える。また，他教科との関連を図り，「大地」や「平和」をテーマにした文学作品や美術作品に込められた思いを捉え，自らの「大地」や「平和」への思いを深める。これらを統合し，自分たちなりの「大地讃頌」の音楽表現を創意工夫する。
応用・ひろがり	合唱曲「大地讃頌」で身に付けた力を活用するとともに，自分たちの地域の自然などへの思いを込めて，地域をテーマにした合唱曲をつくり，地域の方を招いて音楽発表会を行い，作品を披露する。また，その作品の歌詞に込めた思いなどを地域の広報紙で紹介する。

このように「考え・基礎知識」から「応用・ひろがり」までを教師がイメージし，児童生徒にもこれらを示すことにより，「課題発見・解決学習」の質をより高めていくことが期待できる。

(4) 「課題発見・解決学習」において求められるもの

ア 言語活動の充実

知識・技能を習得するのも、これらを活用し課題を解決するために思考し、判断し、表現するのも、全て言語によって行われるものであり、これらの学習活動の基盤となるのは、言語に関する能力である。したがって、「課題発見・解決学習」を推進していくためには、言語に関する能力の育成を重視し、各教科等において言語活動の充実を図ることが大切である。



(ア) 育てたい力の明確化

各教科等の授業に言語活動を設定する場合、児童生徒にどのような力を育てたいのか、教師が目的を明確にすることが大切である。

新学習指導要領でも引き続き、国語科だけでなく、全ての教科等において言語活動の充実を図ることが求められているが、このことは、言語活動を充実すること自体を目的としているのではない。言語活動を効果的に設定することにより、児童生徒に、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育み、教科等の目標を実現することが目的である。

県教育委員会では、「言語活動を通して育てたい力」を明確にした指導事例を作成し、各学校が研修等で活用できるよう、ホームページに掲載している。

参考HP：ホットライン教育ひろしま
「ことばの教育県づくりの推進」—「言語活動の充実」に関する指導資料—

(イ) 目指す児童生徒像の共有化

言語活動の充実を図った教科等の授業を実施することによって、どのような児童生徒の姿を目指すのか、校内の全ての教員がイメージを共有することが大切である。

例えば、「自分の考えをもち、根拠を明確にし、自分のことばで適切に表現することができる児童生徒」というような児童生徒の姿を設定することで、指導の目的が共通理解され、効果が高まる。

さらに、校内でイメージが共有できたら、担当している学年や教科等においても、指導後の児童生徒の姿を設定すると一層効果的である。

参考：本誌 第3章「『確かな学力』の育成（ことばの教育の推進）」P147～149

イ 体験活動の充実

新小学校学習指導要領総則には、体験活動を重視することが示されている。

また、新小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編には、「児童が身体全体で対象に働きかけ実感をもって関わっていく活動が体験活動である。」と述べられている。さらに、人々や社会、自然と関わる体験活動を通して、自分と向き合い、他者に共感したり社会の一員であることを実感したりすること、自然の偉大さや美しさに出会ったり、文化・芸術に触れたり、社会事象への関心を高め問題を発見したり、友達との信頼関係を築いて物事を考えたりなどして、喜びや充実感を実感することができると述べられている。

体験活動は、単に何かをやってみるということではなく、教科等の目標の実現を目的として行われなければならない。また、調べたことをまとめ、発表するだけではなく、自分達が考えたことを更に実行するところまで活動を進めたい。例えば、地域産業の振興策を児童生徒が様々に考えて提案し、それを実行してみるといった、児童生徒の主体性を引き出す活動である。

「広島版『学びの変革』アクション・プラン」でも、「実社会との繋がりを重視した体験的な学び」を重視している。「体験活動」は、「課題発見・解決学習」を推進する上で求められるものの一つと言える。

ウ 知識・技能を活用する学習活動の充実

総合的な学習の時間を始め、各教科等の学習において「課題発見・解決学習」を推進するためには、教科等の指導の中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、現在でも取り組まれている「観察・実験の後、その結果を基にレポートを作成する」、「文章や資料を読んだ上で知識や経験に照らして自分の考えを論述する」などの知識・技能を活用する学習活動の充実を図ることが大切である。

知識・技能を活用する学習活動を行う際、「活用の学習活動を行うためには、まず基礎的・基本的な知識・技能を習得させなければならない」、「学習につまずきが大きい児童生徒には、活用の学習活動をさせるのは無理であろう」、「知識・技能の習得は、習得の学習活動の中で、思考力・判断力・表現力の育成は、活用の学習活動の中で行う」等といった誤った捉えがされている現状もしばしば見受けられるので、留意することが必要である。

「習得」や「活用」の学習と「探究」の学習は、決して一つの方向に進むだけではなく、例えば、知識・技能の「活用」や「探究」がその「習得」を促進するなど、相互に関連し合っただけで確かな学力（基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学習意欲）を伸ばしていくものである。

小学校学習指導要領（平成 29 年）

第 1 章 総則（第 3 の 1（5））

児童が生命の有限性や自然の大切さ、主体的に挑戦してみることや多様な他者と協働することの重要性などを実感しながら理解することができるよう、各教科等の特質に応じた体験活動を重視し、家庭や地域社会と連携しつつ体系的・継続的に実施できるよう工夫すること。

※ 中学校、高等学校及び特別支援学校小学部・中学部も同旨

また、学習につまずきの大きい児童生徒は、暗記や反復を嫌う傾向があり、知識・技能の習得・定着が進まないが、「活用」や「探究」の学習の過程で、学習意欲が高まり、その児童生徒の過去の体験や既存の知識と結び付いて学習が進むことがある。知識・技能の習得・定着には、反復・練習というドリル学習も大切であるが、そればかりではなく、教科等における「活用」の学習や「探究」の学習において、知識・技能を活用する多くの体験をさせることによって、知識・技能の定着が強化され、一層確かなものとなる。

エ 協働的な学習の充実

変化の激しい今後の社会では、多様な他者と協働できる力を有する人材が求められている。「協働」とは、「他者と関わることにより、異なった価値観や考え方に触れ、自らの考えを広げたり深めたりしながら、他者と考えを共有し、共に行動に移すこと」である。

現在、総合的な学習の時間や各教科等において、協働的な学習が行われているが、注意すべきことは、協働的な学習を単なるグループ学習と混同しないことである。協働的な学習は、活発にグループで話し合う授業とイメージされやすいが、重要なことは、一人一人のものの見方や経験等に基づいた異なる価値観や考え方を互いに尊重しつつ、児童生徒が話し合うことによって多様な考え等に触れもっとよい考えがあることに気付いたり、他者の考え等を吟味することで自らの考えを深めたりするプロセスを大切にすることである。また、これらを通して、話し合うことの意義や必要性を児童生徒に実感させることも大切である。

また、例えば、P117で述べたICEモデルに基づいて、教師が適切な場面で児童生徒に「話し合い」のきっかけとなる質問をすることで、協働的に学ぶ際の学習の質を高めることが期待できる。

【話し合い】のきっかけとなる質問の例

I 考え・基礎知識	C つながり	E 応用・ひろがり
_____のリストをあげなさい	_____は_____にどのような影響をもたらしますか？	_____を予測しなさい
主な_____を述べなさい	_____を推定しなさい	_____に対する解決を提案しなさい
_____の文から例をあげなさい	ほかにどのような方法がありますか？	_____が持つ意味は何ですか？
_____をほかの言葉で言い換えなさい	_____にはどのような価値がありますか？	あなたの意見では_____？
_____とはだれですか？	_____と_____の関係を説明しなさい	_____から何を学びましたか？
_____が起こったのはいつですか？	_____は_____とどのような点で似ていますか？	
_____によると、_____はどんな様子でしたか？	_____と_____を比較しなさい	
	自分の経験から例を取って、_____に当てはめなさい	

(Sue Fostaty Young・Robert J. Wilson『『主体的な学び』につなげる評価と学習方法』－カナダで実践されるICEモデル－ 東信堂 P26, 平成25年より)

(5) 「課題発見・解決学習」の評価

ア 学習の過程における質の変容を捉える評価の重要性

新学習指導要領には、評価について右のように示されており、児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視する必要がある。評価に当たっては、児童生徒の実態に応じた多様な学習を促すことを通して、主体的な学習の仕方が身に付くように配慮するとともに、児童生徒の学習意欲を喚起するようにすることが大切である。その際には、学習の成果だけではなく、学習の過程を一層重視することが必要である。

小学校学習指導要領（平成29年）

第1章 総則（第3の2（1））

児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。

※ 中学校、高等学校及び特別支援学校小学部・中学部も同旨

この「学習の過程を一層重視する」とは、学習の過程における学びの質の変容を確実に捉えることである。これにより、教師は、現時点で児童生徒がどのような状況にあり、児童生徒の成長を促すためにどのように指導すればよいかを具体的に考えるようになり、児童生徒の学びを深める指導を目指すことができるようになる。

イ 学習の質を高めるための評価

「課題発見・解決学習」の質をより高めていくためには、表面的な知識を身に付ける「浅い学び」で終わるのではなく、学んだ知識をつなげて新たなものに展開させていく「深い学び」に変えていくことが必要である。

そのためには、「考え・基礎知識」、「つながり」、「応用・ひろがり」と、知識をつなぎ、表面的なものから深い知識へと学びが深まる過程を評価することが必要である。



教科学習にこの評価法を用いる場合、質的な変容・高まりを特に求めたい学習場面において、ふさわしい「問い」（学んだことに独自の意味を見いだすことを要求するような課題）を設定する必要があり、評価する際には、設定した評価規準に「考え・基礎知識」、「つながり」、「応用・ひろがり」という段階をイメージしておくことが大切である。

また、児童生徒にはあらかじめこれらの段階を示し、児童生徒自身が学んだことをつなげてどこまで深めて考えていく必要があるのかを意識させることが必要である。

こうした質的な高まりの段階を教師が踏まえることにより、児童生徒の学びの質を高めるためにどのような問いを発したらよいのか、どのような学習活動がふさわしいのかという指導の工夫について、具体的に描けるようになる。

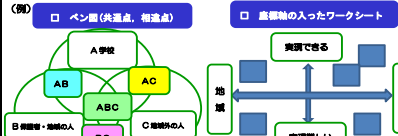
ウ 評価について

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」には、観点別評価については、小・中・高等学校の各教科を通じて、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理することとし、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関して、学習前の診断的評価のみで判断したり、挙手の回数やノートの取り方などの形式的な活動で評価したりするものではないことを示している。子供たちが自ら学習の目標をもち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められている。

また、資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である。さらには、総括的な評価のみならず、一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行い、子供たちの資質・能力がどのように伸びているかを、例えば、日々の記録やポートフォリオなどを通じて、子供たちが自身が把握できるようにしていくことも考えられることが示されている。

広島県立教育センター（平成25・26年度共同研究「総合的な学習の時間における探究的な学習の指導と評価の在り方」）は、総合的な学習の時間の評価の例として、「単元改善シート」に、以下のような評価方法を提案している。

＜総合的な学習の時間における評価方法の参考例＞小学校 単元改善シート（一部抜粋）

探究的な学習の指導について	評価について	改善のポイント
<p>● 児童の実態に応じた手立てを工夫しましょう。</p> <p>(例) <input type="checkbox"/> 児童が学習内容についての知識をもっていない場合 <input type="checkbox"/> 児童が学習内容についての知識をもっている場合</p> <p>① 複数の体験活動を通して、多くの情報を収集し、体験を比較させて考えさせる。</p> <p>② ウェビングを活用 個人→グループ 個人で収集した情報を取り出す。共有。</p> <p>③ KJ法的手法を活用 グループ 情報を分類整理し、情報を整理する。</p> <p>④ 問題の序列化を行う。個人又はグループ理由付けをしながら結論を決定する。</p> <p>① ウェビングやカードを活用し、個人の既知知識を書き出し整理する。</p> <p>② グラフなどの設計や写真等を提示し、児童の認知基準とのずれを生かす。</p> <p>③ 見学やインタビューなど体験活動を行い、問題との違いについて確かめる。</p> <p>④ ウェビングやカードを活用し、収集した情報を再検討し、結論を決定する。</p>	<p>◎評価の観点 () ◎評価規準 ()</p> <p>☆評価方法 <input type="checkbox"/> 行動観察 <input type="checkbox"/> 制作物 (例：ウェビングやKJ法的なワークシート) <input type="checkbox"/> ポートフォリオ <input type="checkbox"/> 自己評価 (例：振り返りカード) <input type="checkbox"/> 相互評価 <input type="checkbox"/> 他者評価 (例：外部講師、保護者等)</p>	<p>● 児童の実態に応じて、多様な評価ツールを用い、評価を促進できるように手立てを工夫しましょう。</p>
<p>● 課題や目的に応じて、相手意識をもって、多様な情報収集の方法を選択しましょう。</p> <p>(例) <input type="checkbox"/> アンケート <input type="checkbox"/> フリップボード <input type="checkbox"/> インタビュー <input type="checkbox"/> 手紙 <input type="checkbox"/> 電話 <input type="checkbox"/> メール <input type="checkbox"/> 調査資料 <input type="checkbox"/> インターネット <input type="checkbox"/> 実験・観察</p> <p>「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）」P. 24～30参照</p>	<p>◎評価の観点 () ◎評価規準 ()</p> <p>☆評価方法 <input type="checkbox"/> 行動観察 <input type="checkbox"/> 制作物 (例：パンフレット、情報誌の入ったワークシート) <input type="checkbox"/> ポートフォリオ <input type="checkbox"/> 自己評価 (例：振り返りカード) <input type="checkbox"/> 相互評価 <input type="checkbox"/> 他者評価 (例：外部講師、保護者等)</p>	<p>● 公共の図書館や公民館が、各集市町の業務を積極的に活用しましょう。 ● ICTを効果的に活用し、遠隔地からの情報収集も工夫しましょう。</p>
<p>● 目的に応じた方法を選択し、比較・分類・序列化・関連付けなど手立てを考えましょう。</p> <p>(例) <input type="checkbox"/> ペン画 (共通画、共通画) <input type="checkbox"/> 産物軸の入ったワークシート</p>  <p>カード グラフ ロマップ ロ図 ロメリット・デメリット ロビフォー・アフター</p>	<p>◎評価の観点 () ◎評価規準 ()</p> <p>☆評価方法 <input type="checkbox"/> 行動観察 <input type="checkbox"/> 制作物 (例：パンフレット、情報誌の入ったワークシート) <input type="checkbox"/> ポートフォリオ <input type="checkbox"/> 自己評価 (例：振り返りカード) <input type="checkbox"/> 相互評価 <input type="checkbox"/> 他者評価 (例：外部講師、保護者等)</p>	<p>● 目的に応じ、相手に合わせた評価ツールを組み合わせるよう工夫しましょう。</p>
<p>● 相手意識や目的意識を明確にし、より効果的な方法でまとめ・表現する方法を考えましょう。</p> <p>(例) <input type="checkbox"/> 新聞 <input type="checkbox"/> レポート <input type="checkbox"/> 報告会 <input type="checkbox"/> 振り返りカード <input type="checkbox"/> パンフレット <input type="checkbox"/> ポスター <input type="checkbox"/> プレゼンテーション <input type="checkbox"/> 自己評価カード <input type="checkbox"/> パネルディスカッション <input type="checkbox"/> ロンボジウム</p> <p>「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（小学校編）」P. 38～44参照</p>	<p>◎評価の観点 () ◎評価規準 ()</p> <p>☆評価方法 <input type="checkbox"/> 行動観察 <input type="checkbox"/> 制作物 <input type="checkbox"/> ポートフォリオ <input type="checkbox"/> 自己評価 (例：振り返りカード) <input type="checkbox"/> 相互評価 <input type="checkbox"/> 他者評価 (例：外部講師、保護者等)</p>	<p>● 内容や学習スタイルなど、教科との関連を生かし、相手や目的に応じて、多様な表現方法を指導しましょう。</p>

◎評価の観点
()
◎評価規準
()
☆評価方法
 行動観察
 制作物 (例：ウェビングやKJ法的なワークシート)
 ポートフォリオ
 自己評価 (例：振り返りカード)
 相互評価
 他者評価 (例：外部講師、保護者等)
※ 適切な評価方法を選択する必要がある。

3 平成31年度「学びの変革」全県展開の取組

「学びの変革」全県展開のイメージは、学校の教育活動の様々な場面で、児童生徒が主体的な学びを実現している状態である。とりわけ、全教員が総合的な学習の時間をはじめ、各教科等において「課題発見・解決学習」を実践することが求められる。

全県展開に向けて、これまで各学校において、次のことに取り組んできた。

- 学校教育目標を踏まえ、自校の児童生徒に育成を目指す資質・能力を設定すること
- 自校が設定した育成を目指す資質・能力の一つ一つについて、発達段階に応じた目指す児童生徒の具体的な姿を明確にすること
- 自校が設定した育成を目指す資質・能力を「どの教科等で」「いつ」育成すべきかについて構想すること
- 「課題発見・解決学習」の単元を開発し、次年度の年間指導計画へ位置付けること

平成31年度は引き続き、これまで積み重ねてきた取組や自校において開発した単元をブラッシュアップしたり、実践のための事例集等に掲載されている他校の実践を参考にしたりしながら、それぞれの地域や学校、児童生徒の実態等を踏まえ、教員一人一人が、自分だったらどう改善するかという視点で議論し授業改善を行い、各学校が組織的な取組を一層進めることが必要である。

その際に、『「課題発見・解決学習」の単元計画を見直す視点』及び「日頃の授業を見直す視点」の例を以下に示す。

【「課題発見・解決学習」の単元計画を見直す視点（例）】

- 目標に迫る問いを、児童生徒から引き出せているか。
- 児童生徒に課題解決の見通しをもたせているか。（既有的知識や経験、他教科等の既習事項の活用 等）
- 児童生徒にとって、課題解決に向かう必然性のある学習活動となっているか。
- 児童生徒の深い学びを実現するための指導の工夫が行われているか。
- 目標に向かって児童生徒の深い学びが実現していく姿を具体的にイメージできているか。
- 児童生徒が、自らの見方・考え方の高まりや学習の仕方を振り返ったり、それらを活用できる場面を考えたりする「振り返り」の場が設定されているか。

等

【日頃の授業を見直す視点（例）】

- 児童生徒の学習意欲を喚起させるような導入の工夫が行われているか。
- 教師が話し過ぎず、児童生徒が自ら思考し、表現できるような言語活動を充実させているか。
- 目標を達成させるために必要な協働的な学びの場を適切に設定しているか。
- 多様な考えを引き出す問いの工夫が行われているか。
- 本時の目標に対応したまとめを自分の言葉で表現させているか。
- 本時の目標を達成することができないと予想される児童生徒に対して、効果的な手立てを講じているか。

等

4 育成を目指す資質・能力について

これまでは、「何を知っているか」という知識が重視されてきた。しかし、「広島版『学びの変革』アクション・プラン」では、変化の激しい今後の社会で活躍するためには、知識や技能に加え、情報活用能力、建設的批判能力、思考力・判断力・表現力等のスキルや、価値・態度、倫理観といったものを含めた資質・能力を総体とし、それらを育成する必要があるとした。新学習指導要領においても、同様な考えに基づき、三つの柱で資質・能力を整理している。広島県では、既に、こうした資質・能力を育成するため、各指定校を中心に、「課題発見・解決学習」の単元開発を通して先行的に取り組を進めてきたが、今後、「主体的な学び」を実現させる上で鍵となるのがカリキュラム・マネジメントである。

カリキュラム・マネジメントを進めるに当たっては、どのような力を育てるのか、何のために学ぶのかという「目標」、何を学ぶのかという「内容」、どのように学ぶのかという「方法」の一体化を図ることが重要である。また、カリキュラム・マネジメントの前提となるものとして、カリキュラム・デザインがある。カリキュラムをデザインしていくためには、地域の地理や気候といった自然環境及び歴史や風土、文化、伝統といった社会環境などを踏まえることが大切である。そして、教科等の系統性を縦糸とし、教科等の関連性を横糸として捉えてカリキュラムを編成していくことが必要である。

具体的には、例えば、中学校社会（地理的分野）で、「身近な地域」の学習を行う場合、地域で見られる課題を把握し、課題の解決に向けて多面的・多角的に考察するという単元のねらいを確実に達成するということが大切である。ねらいの達成に当たっては、前の単元や他教科の既習事項を活用し、身近な地域の課題解決に向けて、自分たちで集めた資料を基に話し合いを取り入れることが考えられる。その際、話し合いを通して、学校が設定した「育成する資質・能力」の中の情報活用能力やコミュニケーション能力が効果的に育成できると考えた場合、資質・能力について当該学年が設定した「目指す具体的な姿」と照らしてどのように育っているかということを実画的、継続的に見取っていくことが必要である。

さらに、小学校の6年間や、中学校、高等学校の3年間、義務教育学校や小中一貫教育の9年間、あるいは中高一貫教育の6年間といった教育課程全体でデザインし構成していく必要がある。

参考：本誌 序章「新学習指導要領の実施に向けて」P13

<カリキュラム・マネジメント>

教育課程はあらゆる教育活動を支える基盤となるものであり、学校運営についても、教育課程に基づく教育活動をより効果的に実施していく観点から組織運営がなされなければならない。カリキュラム・マネジメントは、学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくことであり、新学習指導要領においては、中央教育審議会答申の整理を踏まえ次の三つの側面から整理して示されている。具体的には、

- ・ 児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと
- ・ 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと
- ・ 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

などを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことと定義されている。

参考：小学校学習指導要領解説 総則編（平成29年）カリキュラム・マネジメントの充実（第1章第1の4）

※ 中学校、高等学校及び特別支援学校小学部・中学部も同旨

5 「課題発見・解決学習」の事例

授業において、教師が一方的に「今日は〇〇について勉強します。」と宣言し、めあてを提示するといった形では、児童生徒の学習に対する課題意識や学習への意欲は喚起されない。「課題発見・解決学習」では、これまでの児童生徒の経験や既存の知識等との「ずれ」や「隔たり」を感じさせたり、対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせたりする工夫を行うことにより、児童生徒に課題意識をもたせ、めあてを設定していくことが求められる。

しかし、全ての教科等で毎時間、児童生徒に課題意識をもたせるところから学習活動を展開できるとは限らない。「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・創造・表現」、「実行」、「振り返り」という「課題発見・解決学習」の過程において、それぞれどのような学習を設定するのか、単元全体を見据えて考えることが大切である。

次のとおり、県教育委員会ホームページに、各校種の事例を掲載しているので参照していただきたい。

【「課題発見・解決学習」事例一覧】

小学校・中学校の事例

【『課題発見・解決学習』実践のための事例集』に掲載されている事例】

平成 29 年度「学びの变革」パイロット校事業「課題発見・解決学習」実践のための事例集
ホームページアドレス
<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/jreisyuh29.html>

【『課題発見・解決学習』実践のための事例集』に掲載されていない教科等の事例】

平成 31 年度広島県教育資料ホームページアドレス
<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/shiryoh31.html>

高等学校の事例

平成 31 年度広島県教育資料ホームページアドレス
<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyouiku/shiryoh31.html>